

勉強があまり好きではない。なぜ勉強しなければならないのかわからない。学校にいきたくない日もある。そんなふうに思っていたと、この読書感想文に書く人は多いです。私も学校に通っているときは同じように思っていました。そして課題図書を読み、学校というものがあり、勉強するということが、当たり前のことではないと、みなさんが知っていきます。では、そう知ったことで、勉強が好きになるだろうか、学校がたのしくてしかたなくなるだろうか、というと、そんなことはないと思います。自分は恵まれている、幸せなのだと思います、何か不思議な罪悪感を覚えながらも、やっぱり勉強熱心にはなれないのではないのでしょうか。けれどそれでいいのだと思います。学校というものがそもそも存在しない場所があり、学校があっても通えない人たちがいる、と知ることが重要なことだと思うのです。自分の見ている「ここ」だけが、世界ではないと知ることが。

中学生の部の武田美由紀さんの書いた「ルールを大切に思うのは、そのルールの意味することへの信頼があるから」という文章に、私は目が覚める思いがしました。「平和」という言葉を持ち出すと、手の届かないような大きなことに思えますが、目の前の一人のことを考える、と考えれば、平和はもっと私に近いものになると、この感想文に教えてもらいました。野口美沙さんは、怒りの連鎖が何も生み出さないことに気づき、異文化や他宗教にたいする姿勢について考えています。多くの方が、女の子が差別されるのは遠くの国の問題だとするなかで、井上夏希さんはジェンダー平等の格付けで、日本が下位に位置していることを指摘しています。そんな社会のなかで、ひとりの人間としてどう生きていくか考え、すばらしい宣言をしています。

高校生の部の水野茉莉香さんは、自分自身の率直な言葉で「女」であるとはどういうことかを考えています。多感な時期に女性器切除の問題や、女性性を直視するのは、書かれているとおりに目を背けたいことだったと思います。それらに真摯に向き合った文章に私は強さを感じました。先ほども書いたように、藤澤息吹さんも、差別は果たして遠いどこかの問題だろうかという疑問を持ちます。偏見や安易な誤解から差別がどのように生じ、それが伝統にまでなることがあると考察します。差別する側にならないように……ということもまた、私たちの手の届く「平和」であり、同情よりよほど意義ある結論だと思います。

深見亮太さんは「Because I am a Girl 私は女の子だから」を、自身が眠れなくなるほどきちんと読み込み、そして今の自分に何ができるかを考えています。そうして出てきたアイデア、「本のリレー」に私は感動しました。ネガティブな内容の多い本を、友人に手渡すのは勇気がいるけれど、でも、だれにでもできるかんたんなことです。かんたんでありながら、とても重大なことだと私は思います。

今年もまた、本を読んで感想を書いてくださったことに感謝します。ありがとうございました。

深見亮太